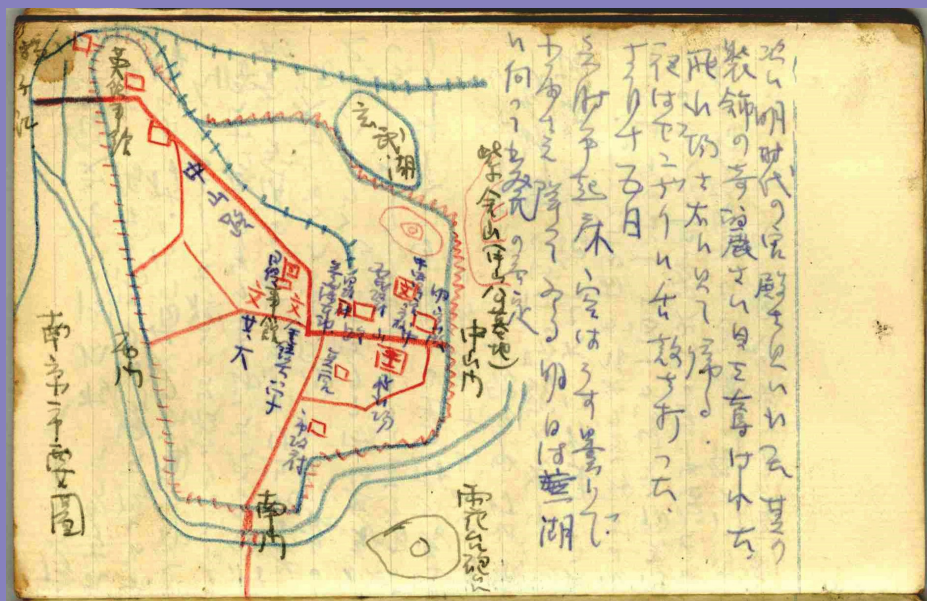


南京大虐殺から85年 2022年 東京証言集会



父との10年の対話のあと 父は「従軍日記」を子に託した 父の戦争を ともに背負う

12月10日(日) 午後2時(1時30分開場)

全水道会館大会議室

(JR 水道橋駅下車、白山通り北へ5分)

講演: 田中信幸さん

(『一道背負』著者/教科書ネットくまもと事務局長)

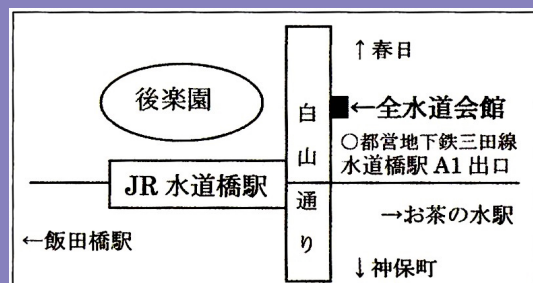
父の戦争責任を一緒に背負って

参加費: 1000円(オンラインとも)

ノーモア南京の会

連絡先: Email: nomorenanjing1937@gmail.com

FAX: 03-3889-9499



※感染予防のため事前予約制とします。
メールまたはFAXでお申し込みください。

※オンライン参加もできます。
左のメールでお申し込みください。
(申込み締切り 12月8日正午)

ウクライナにおける戦争がつづくとともに、「次はアジア」とばかりに、朝鮮半島危機、台湾危機が叫ばれ、日本の防衛力増強、「敵基地攻撃能力」が現実の物としてとりあげられています。過去の戦争の反省なしに、軍事的緊張だけを高めることで、東アジア、近隣の国々との、希望があり、安心できる未来を手に入れることができるでしょうか。

かつての「日本が行った戦争」の問題に関して、故安倍首相は、戦後 70 年談話で、「あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。」と語りました。しかし、かつて、野間宏を団長とする日本文学代表団を迎えた時、中国の陳毅副総理は「過ぎたことは水に流しましょう」といい、日本側代表団は「いいえ、水に流すことは日本としては出来ません」と言いました。はたして私たちはどちらの側の意見を尊重すべきなのでしょう。

ここにかつて中国、アジアの戦争に参加した兵士の父から「従軍日記」を託された息子がいます。彼は、長年の父との対話の中で、「父の戦争」を問い、「父の苦しみ」を「ともに背負う」と言いました。「戦争」といえば、すぐに「外交抜きの軍備増強」という考えではなく、まずは、かつて父、祖父の世代が行った戦争に真剣に向き合い、その歴史にどう関わり合いながら、未来にむけてどうすすむべきかを、ともに考えていきませんか。

父：武藤秋一さん

1915 年 熊本県生、1935 年 陸軍第 6 師団歩兵第 13 連隊（熊本）入隊

1937 年 7 月 27 日、北九州から朝鮮半島を経て中国戦線へ。歩兵第 13 連隊第 9 中隊（伍長）。この日から、1938 年 7 月 4 日まで「従軍日記」をつける。

1937 年 9 月 2 日 「便衣隊首切りに行く。/ わが分隊は皆一剣ずつ突いた。」

（9 月 9 日まで、ショックで日記がかけなくなる）

1937 年 12 月 13 日 南京攻略戦に参加 3 日間滞在後蕪湖へ移動。慰安所に通う。

1938 年 6 月、徐州戦の途中で負傷し、帰国。

1941 年二度目の招集で、ハイラルでソ満国境警備

1944 年秋三度目の招集で「ボルネオ派遣軍」として南方へ。マニラで敗走、米軍捕虜となる。

1946 年 8 月帰国。

（「日記」は 1 ページが検閲で切り取られている）

子：田中信幸さん

1951 年 熊本県生。

1972 年沖縄返還反対闘争で逮捕起訴され、獄中から父への手紙を書き、その後 10 年にわたる「対話」。1995 年父から「従軍日記」「手紙」を渡される。「父の日記」「慰安所」の記録などで韓国、中国との交流。

2014 年 3・1 節で韓国 MBC 『父の日記』放映。2015 年人民日報社から『一道背負ー日本人父子的侵華戦争責任対話』出版。

教科書ネットくまもと事務局長、部落解放運動、市民運動に参加。